明代通行『玉台新詠』本の解題

植木久行

一

徐陵撰『玉台新詠』十巻は、明代の中期から後期にかけて、数種以上刊行されているが、一般に善本に乏しく、「妄りに増益有り」と評される（『四庫提要』巻三十七）。明末の崇禎六年（一六三三）、蘇州の蔵書家趙均が刊行した覆宋本（南宋の陳玉父本の覆刻）と比較してみると、（1）詩の所収巻数、（2）作者名、（3）所収詩数、の三点において大きく異なる。なかでも所収詩数の増加は特に著しく、趙均や銭謙益らによって〝妄増詩二百〟をもつ俗本として厳しく批判された。しかし趙均の基づいた南宋の陳玉父本自体が悪名高い麻沙本であるとされ、すでに誤訛の多さ、体例の不備、詩の増入等の欠点を持つ。従って文献批判の意味でも、明版の実態をより深くさぐることがぜひとも必要である。同時にまた、数種の刊本の存在は、もちろん当時の印刷術の急速な進歩とも直接関係するが、他方では『玉台新詠』を求める読者層をある程度想定するのに充分である。いいかえれば、総集や別集の出版とその流伝は、一般に各時代特有の詩文実作の態度や文学理念・文学主張等と密接に関連するはずだからである。私はすでに別稿[1]の中で、明末・清初の『玉台新詠』研究が主として反古文辞派の抬頭のなかで確立されたことを指摘した。本稿の記述は、この点を一層補足し、明代の文学史を再整理するのにも役立つであろう。

二

明末清初の有名な校勘学者馮舒は、明代の主要なテキストとして次の四つをあげる。(2)

此書、今世所行、共有四本。一為五雲渓館活字本、一為華允剛蘭雪堂活字本、一為華亭楊元鑰本、一為帰安茅氏重刻本。活字本不知的出何時、後有嘉定乙亥永嘉陳玉父序。小為朴雅、譌謬層出矣。華氏本刻于正徳甲戌、大率是楊本之祖。楊本出万暦中、則又以華本意儳者。茅本一本華亭、誤踰三写。

この説によれば、明代の主要な刊本には、(1)五雲渓館活字本、(2)華允剛の蘭雪堂正徳甲戌刊本、(3)楊元鑰の万暦刊本、(4)茅氏重刻本、の四種がある。そして(2)(3)(4)はほぼ同系統のテキストであるとともに、後者にいたるほど、誤りが増加しているという。本稿では、まずこの四種の解題から始める。

(1)五雲渓館活字本

本書は次の蘭雪堂本とともに、いわゆる銅活字本である。当時の低い活字印刷の技術では、百部以上の書を印刷することは至難のわざとされ、本書は一時、伝本が非常にまれであった。しかし今日では、四部叢刊のなかに影印され、容易に見ることができる。

行款は半葉十行、行十九字、縦十八・五センチ、横十五・三センチ、(3)白口、左右双辺。巻十の終りに陳玉父の後叙、および南宋の晁公武撰『郡斎読書志』の記事を一部付載する。また版心には「五雲渓館活字」の六字を印するという。

民国の蔵書家鄧邦述は、本書に対して、「拠る所は、乃ち宋本。霊均の繙する所の陳玉父本と又た同じからず」（『寒瘦山房鬻存善本書目』自校本）と述べるが、いささか疑問である。確かに本書は、趙均覆宋本と異なる点を持つ。巻五の巻末の「潘黄門述哀」（江淹）と巻六の呉均「梅花落」の二首は覆宋本にない「増」詩であり、他方、巻六の呉均「和蕭洗馬子顕古意」六首のうちの其二・三・四・五、巻六の王僧孺「為人述夢」と費昶「長門后怨」、巻七の簡文帝「變童」、巻八の庾肩吾「和湘東王」二首のうちの「応令冬暁」と庾信の「七夕」、あわせて九首の詩を脱する。また巻九の傅玄「歴九秋篇、董桃行」十二首を、本書では其十一・十二の二首のみ、傅玄の作とし、他の十首をすべて簡文帝の作となして同巻の後に収録する。このほかにも、異同をもつが、しかし詩数や詩の配列はおおむね趙均覆宋本と同じであり、その差異は〝妄増詩二百〟を有する通行本に比べるとごくわずかであるにすぎない。従って本書が全く陳玉父本を参照しなかったかどうかは、少し疑問なのである。少なくとも両者は同系統のテキストであるように思われる。しかも明代の通行本の多くは陳玉父の叙を欠くが、本書がそれを付載する点も注意されてよい。

馮舒は本書に対して「小か朴雅為るも、譌謬層出す」と評し、内田泉之助博士も「文字の誤りが多く、訂正を要する点が少なくない」と評される（明治書院『玉台新詠』上の解説）。一般に明代の銅活字本は校定が不充分で、初歩的な誤字・脱字等が多いが、他方、その拠った底本はいずれも宋元の旧本であるという長所を持つ。[4] このことは、そのまま本書にもあてはまるようである。しかも陳玉父本が悪評高い麻沙本であることもあって、やはり校勘上、役に立つ（徐乃昌の「札記」参照）。

さて五雲渓館が誰の堂号であるかは、全くわからない。ただこの他にも、撰者不詳の『襄陽耆旧伝』を刊行する。陸心源輯『皕宋楼蔵書志』巻二十六、『襄陽耆旧伝』の条には、「板心に五雲渓活字両行有り」とあるが、現在、静嘉堂に伝わるそれは写本であり、従ってその板心の字を欠く。また本書の刊行年月も詳かではなく、潘承弼・顧廷竜共編

『明代版本図録初編』巻九には、「明の嘉靖中」（一五二二―一五六六）とし、内田博士は前引の解説のなかで「明の屠隆刊本で、神宗ごろの万暦版」とする。しかし両者の説の根拠は全く不明である。屠隆（一五四二―一六〇五）とは、いうまでもなく明代の有名な文人であり、詩文・戯曲にすぐれ、『考槃余事』等の著もある。一方、北京図書館編『中国印本書籍展覧目録』（一九五二）には、「明の中期」という漠然とした時代設定をする。明代の銅活字本は、弘治・正徳年間から嘉靖・万暦に到る八、九十年の間、蘇州周辺の江南地方を中心に盛行し、その後、一時とだえる。この意味で、おそらく「明の中期」と記したわけであろう。

（2）華允剛の蘭雪堂甲戌刊本

本書は『増訂四庫簡明目録標注』に著録し、正徳九年（一五一四）甲戌に刊行された銅活字本である。主要な書目類にもほとんど著録されない稀覯本であり、清の蔵書家馬瀛の『唫香僊館書目』集部に「明錫山華氏蘭雪堂活宋板印本四本」と見えるにすぎない。刊行者の「華允剛」とは、錫山（無錫）の華堅のこと。たとえば、正徳十一年（一五一六）に刊行された『春秋繁露』の終りに、

正徳丙子季夏、錫山蘭雪堂華堅允剛活字銅板、校正印行。

とある刊記等[5]によれば、允剛は華堅のあざなである。ちなみに、この他の蘭雪堂活字本には、正徳八年刊『白氏長慶集』、正徳十年刊『芸文類聚』『蔡中郎集』等があり、今日伝存する。四部叢刊の『蔡中郎集』は、この蘭雪堂本である。民国の書誌学者葉徳輝が『書林清話』巻八に「明人の活字板は、錫山の華氏を以て最も有名と為す」と述べるように、蘭雪堂の華堅・華鏡父子の手に成る銅活字本の印行は、親戚[6]の会通館の華燧（一四三九―一五一三）のそれとともに、明代活字本の権威として名高い。馮鰲の識語をのせる虞山二馮先生閲本『玉台新詠』（内閣文庫等蔵・清版）に

は、「錫山の華綺天和校刻」とあるが、この華綺もおそらく華氏一族の末裔であろう（ただし、銅活字本ではない）。

清末の蔵書家丁丙撰『善本書室蔵書志』巻三十八には、「明正徳仿宋刊本」（二冊）を著録し、

毎葉三十行、行三十字。毎巻有篇目、連属詩詠、小楷精堪。明正徳翻刊也。

とある。この書がはたして蘭雪堂本かどうか疑問である。鄧邦述は『寒瘦山房鬻存善本書目』巻二の条で、正徳刊本とする根拠がわからないとする。確かにその行款等は、おおむね趙均覆宋本と同じである。鄧邦述はさらに『増訂四庫簡明目録標注』に引く清末の蔵書家周星詒（一八三三―一九〇四）の「正徳翻宋本陳伯玉本、毎葉三十行、行三十字、後に一の趙霊均の跋多し。乃ち凡夫（趙宧光）の子なり」とある記述を論拠の一つとして、

趙氏所刊、行款・字体精堪、皆一一如丁氏所説。趙氏父子好書。不応未見、見而覆刊。当時諸人、亦不応不歯及也。窃疑正徳刊本与趙本者、二而一者耳。

と論じている。周氏の陳伯玉は陳玉父の誤りであり、また明の正徳年間には、もちろん明末、覆宋本を刊行した趙均はまだ生まれてはいない。従って巻末に趙均の跋があるというのは、すこぶる疑わしいのである。この意味で、鄧邦述の疑問は当然といわなければならない。しかし丁氏や周氏の不明瞭な記述等から、正徳刊本の存在そのものを否定することはできない。馮舒・銭曽[7]・馬瀛等はもとより、清の邵懿辰も本書を目睹して「佳」と評しているからである（『増訂四庫簡明目録標注』巻十九）。

（3）楊元鑰の万暦刊本

本書は、馮舒の指摘によれば、蘭雪堂本の系統を引き、恣意的に改竄を加えた万暦刊本である。後述する茅氏重刻本が本書に「一（ひと）えに本づく」ものとする馮舒の説に従えば、茅本は万暦七年（一五七九）の刊行であるので、本書

は万暦初年の出版となる。

内閣文庫に所蔵する明版八冊（後の二冊は鄭玄撫撰『続玉台新詠』五巻）が、この楊本ではないかと推定される。同書には、序跋や刊記等を欠くが、巻七と巻十の本文の最初に「華亭楊秉鑰校」とあるからである（この二か所のみ）。馮舒の識語には「楊元鑰」とあって、「楊秉鑰」とはない。しかし同じ「華亭」の人であり、しかも虞山二馮先生閲本（前出）にみえる五か所ほどの楊本の注記は同書と全く一致する。従って両者が同一人であることは、ほぼ疑いない。ちなみに、『増訂四庫簡明目録標注』に収める邵章の「続録」や莫友芝撰『郘亭知見伝本書目』巻十六には、ともに「楊鑰」に作り、中間の一字を欠く。

内閣文庫所蔵本は、半葉十行、行十八字、白口、左右双辺（明治書院刊『玉台新詠』下の巻頭には、本書の書影を一葉収める）。本書の特色は、徐陵の序に続けて「名家世序」を付載することである。名家世序とは、各王朝ごとに詩人名をまとめて列挙した一種の目録であり、『続玉台新詠』五巻を合刻する関係から、陳（三十五人）・隋（十九人）の項もある。所収の詩数や配列方式は、内閣文庫に蔵するもう一種の明版（明天啓二序刊）と同じく、いわゆる妄増詩約二百と評される通行本（俗本）である。ただし、妄増詩の出所はまだ確認されていない。本書の巻五は宋版（趙均覆宋本）の巻七、巻六は宋版の巻五、巻七は宋版の巻六にほぼ相当し、また一部の巻では、所収詩人の姓名を異にする。たとえば、宋版巻二に収める阮籍の「詠懐詩」以下、左思の詩に到る二十三首を巻三に、宋版の巻三に収める荀昶の「擬相逢狭路間」以下の詩を巻四に移動するという具合である。これらはいずれも後述の徐学謨本においても同様であり、明版の多くに共通した特徴である（五雲渓館本はこれと異なり、蘭雪堂本は未詳）。ちなみに、明版が宋版の巻七を巻五へあげたのは、梁の武帝や簡文帝等の帝室関係の詩を梁代の冒頭に置こうとしたための処置である。清の紀容舒は、この点に関して、帝王の詩が臣下の詩の間に介在する（巻五・六と巻八は梁代の詩人の詩を収める）のは、一見、宋版の編

次の誤りのように捉えられがちであるが、これは漢以来の伝統にそう配列方法であり、「信に後人の能く偽託する所に非ざるなり」と述べている（『考異』目録）。

このように、「楊本は閑いに宋刻と異なる」（後引の孟璟の語）。『箋註』本の各巻末に付す宋刻不収の詩一七九首は、全て本書のなかに見え、さらに後述の「擬古」詩一首を加えると、妄増詩一八〇首となる。これに対して、逆に明版の脱する詩もある。陸機の「擬西北有高楼」（巻三）、施栄泰の「雑詩」（巻四）、簡文帝の「怨」（巻七）、呉均「和蕭洗馬子顕古意」六首のうちの其二と其四（巻六）、王僧孺「為人述夢」（巻六）、庾信「七夕」（巻八）、劉浩「詠繁華」（巻十）の合計八首。このほか、鮑照の「擬古」と簡文帝の「詠舞」は、詩題は同じだが、内容は異なる（後者の「詠舞」詩は『箋註』本の宋刻不収に収める）。

明版に多い妄増詩の一典型として、昭明太子の例をあげよう。宋版には一首も収めないが、本書では巻五に五首「蓮舟買荷度」「照流看落釵」「長相思」「名士悦傾成」「美女晨粧」（ただし、趙均覆宋本では、「長相思」を除く四首をみな簡文帝の作とする）、巻九に三首「江南曲」「竜笛曲」「採蓮曲」、合計八首収める。この点は従来から昭明太子と簡文帝の文学観の対立という観点から注目され、紀容舒は「意に避くる所有りて、武帝・簡文の間に更に一人を置くを欲せず。故に屏けて録せざるのみ」と解した（『考異』巻七）。

（4）茅氏重刻本

——付、鄭玄撫撰『続玉台新詠』の解題——

馮舒の指摘によれば、本書は楊本の忠実な覆刻であり、誤りは一層多くなっているという。『北京図書館善本書目』巻八に、「玉台新詠十巻陳徐陵輯　続五巻明鄭玄撫輯　明万暦七年茅元禎刻本」として二部を著録する。[8] 莫伯驥撰『五

十万巻楼蔵書目録初編』巻二十一にも、「呉興」の茅元禎重刻本を著録するが、馮舒のいわゆる「帰安」は、呉興の別名である。

葉徳輝撰『郋園読書志』巻十五によれば、本書には、徐陵の序の後に「己卯季秋朔日、銭塘の袁大道、心遠楼に書す」の両行があり、また「全書正楷、微しく行体有り」とある。つまり、本書は袁大道の心遠楼刊本として出版されたのである（葉徳輝が同条で己卯を万暦ではなく「正徳」にとるのは、馮舒の識語を誤引した結果の単純な誤りである）。

『五十万巻楼蔵書目録初編』巻二十一によれば、本書は半葉九行、行十八字。前に新安の呉世忠の撰した序文が徐普の書で書かれているという（『郋園読書志』も同じ）。同書に引く呉世忠の序文（刻玉台新詠序）には、

方今、五緯順軌、三事修文、乗運躍鱗、優游金馬。奏御且千、踵風宗雅。将復古道、必先異書。而是編残簡甚訛、曽莫校讎。頃方生敬明、挾策遠遊、購此閲市。厥交梧埜鄭君、受以鋟布、広之四方。甫竣、而生已長逝、宿為異物。悲夫。鄭君又沿陵以下、益之陳・隋。披巻寓目、海不捐珠。

云々とある。当時、テキストが大変乱れ、鄭君は、方敬明が旅先で買った書を刊行し、あわせて徐陵の編纂以後に作られた陳・隋代の艶詩の総集（『続玉台新詠』）を作り、付載したという。特に注目すべき言葉は、「将に古道を復せんとすれば、必ず異書を先にす。而るに是の編、残簡甚だ訛り、曽て校讎する莫し」である。この発言は、沈逢春の「玉台新詠序」のなかに、「今の人は唐有るを知るも、唐以前を知らず。其の三百篇の脈に接する者、漢魏六朝の諸篇は、故より在り」とある言葉とともに、明の嘉靖から万暦年間にかけて、古文辞派の有名な〈詩は盛唐、文は秦漢〉という文学主張が、いかに広く世間に浸透していたか、を如実に知る資料の一つである。こうした古文辞派の文学史観等に対する懐疑や是正のなかから、『玉台新詠』の再刊が計画され、実行されていく。

葉徳輝は「方・鄭、何人為るかを知らず」（前引書）と記すが、これはおそらく鄭玄撫の「刻玉台新詠後序」を見る

ことができなかったからであろう。ここで鄭玄撫とその『続玉台新詠』について補足しておきたい。内閣文庫所蔵本（五巻一冊）は半葉九行、行十八字、白口、左右双辺、縦二十三・八センチ、横十五・九センチ。「後序」の版心下に「黄鍍刊」の字がある。同書に付す「後序」によれば、方敬明は嘉靖十八、九年ごろ没し、「厥の交の梧埜鄭君」とは徽郡の梧野山人鄭玄撫を指す（同書では、各巻の始めに梧野草堂続編とする）。鄭玄撫については、銭謙益編『列朝詩集』丁集中に、「字は思祈、号は梧野、歙の人」とあり、次に引く「湖上にて美人に贈る」詩一首を収める。

琵琶新曲転声遅　琵琶の新曲　転た声遅く
停棹中流日暮時　棹を中流に停む　日暮るる時
細雨可憐紅袖湿　細雨　憐れむべし　紅袖湿えるを
愁雲偏惹翠眉垂　愁雲　偏えに惹く　翠眉垂るるを

この詩は、いわば艶詩の小品であり、『玉台新詠』の続編を企てた人にふさわしい。ちなみに、朱彝尊編『明詩綜』巻五十には「折楊柳」一首を収め、陳田編『明詩紀事』己籤巻二十には「明妃曲」一首を収める。いずれも情緒纏綿たる感傷的な詩風である。別集『梧野集』もあるという（『明詩綜』）。

約一八〇〇字におよぶ長篇の「後序」の内容に触れたい。鄭氏はまずその冒頭で正続十五巻を編纂・刊行した経緯を説明する。

幾んど四百余年、俗漓く風下りて、霊秘珍んずる莫し。予夙に之を悼み、博く世家に求め、幸いに塵几に獲たり。篇残い簡乱れて、憑証由る無し。嘉靖己亥、方子敬明、諸を金陵に購い、帰りて予に畀う。予始めて余篇を刪り、其の落翰を理め、儷いを陳・隋に進め、演べて十五巻と為す。

この後序は、嘉靖十九年（一五四〇）正月十五日の日づけを持ち、終りの部分に方敬明の死没を記す。従って方敬

明は一年前（嘉靖十八年己亥）、金陵（南京）で『玉台新詠』を買って帰ってきた後、まもなく急逝したようである。当時の金陵は、永楽帝の北京遷都以後も副都として繁栄し、南方の学術の中心地でもあった。明の胡応麟の『経籍会通』巻四によれば、金陵は燕市（北京）・閶閭（蘇州）・臨安（杭州）とならぶ四大書籍集散地の一つであった。

序文中で特に注目すべき点は、「予始めて余篇を刪り、其の落翰を理め……演べて十五巻と為す」という言葉である。鄭玄撫は世家旧蔵の残欠本と方敬明講入書とを対校する過程で、「余篇を刪り、其の落翰を理め」て整理したらしい。ここに〝妄増詩約二百〟の加わる直接的な原因があるように思われる。このことはもちろん、当時テキストが大変乱れていたこととも密接に関連するわけであるが、鄭玄撫の「整理」自体にも大きな問題があったに違いない。というのは、一般に妄増詩二百を持つ版本はいずれも鄭玄撫本の後に刊行されたものであり、その強い影響力を示唆している。従って大幅な妄増の原因を考える際には、鄭玄撫の存在を無視することはできない。

十五巻本の編纂を終えた鄭玄撫は、方敬明と一緒に刊行しようとすると、方敬明はかえって「時に唐朝を宗ぶに、子独り遐音（遐き六朝文学）を懌ぶ。乃ち拘りて未だ通ぜざること無からんや」と諫めたという。この発言も、古文辞派の主張の浸透力を端的に物語る。これに対して、鄭氏は「詩は諸を民情に本づき、風雅に始まり、李唐に備わる」ものであるが、『玉台新詠』に収める六朝詩は、『詩経』の遺響としても、また唐詩の先蹤としても重要な位置を占めるものだとして反論し、方敬明を説得する。このあと、漢の宋子侯・秦嘉より陳の後主・庾信等に到るまでの主要な詩人に対する評語が綿々と続く（この部分が最も長い）。

『続玉台新詠』五巻本の内容に触れたい。本書は陳・隋の作者、たとえば陳の後主・徐陵・張世見・盧思道・隋の煬帝ら六十四名の詩歌を収める。徐陵のように、すでに『玉台新詠』十巻のなかに収められた詩人もある。この続編の出現によって、宮体詩を核とする六朝期の艶詩の流れが一層理解しやすくなった。この例などは、明代の文学史の

一特徴――過去の文学に対する通史的な展望を表すものであろう。構成は巻一・二・三が五言詩、巻四は七言詩を中心とした雑言体の歌詞、巻五は五言四句の詩。この収録形態は明らかに徐陵の編纂方式にならうものである。収める詩数は巻一（五十六首）、巻二（九首）、巻三（二十二首）、巻四（四十七首）、巻五（二十六首）、合計一六〇首。ちなみに、前述の明天啓二序刊本では四巻であるが、これは収録詩数の少ない巻二と巻三をあわせて一巻としたものであり、所収内容に異同があるわけではない。この鄭玄撫本の刊行以後、続編を付載するのを通例とする。

茅本は『四庫提要』巻三十七に「顚倒改竄更に甚だし」と酷評されるが、五雲渓館本や蘭雪堂本がともに印刷部数の少ない銅活字本であることを考えると、楊本やこの茅本の果たした役割は、『玉台新詠』の流伝を考える際には、やはり看過できない大きさを持つ。

三

既述の四種以外にも、もちろん明の中・後期に刊行された版本がある。(9) 本章では、三種の版本について追記する。

（a）張嗣修の万暦刊本

本書は『増訂四庫簡明目録標注』に「明万暦中張嗣修刊本」として著録され、清の康熙四十六年（一七〇七）、孟璟はその万暦刊本ではなく、張嗣修自身の手録旧抄本（後述）によって覆刻している。このことは、『郘亭知見伝本書目』巻十六に、「康熙丁亥、孟璟、万暦丁丑の張嗣修手録袖珍本を以て上板す」とある。万暦丁丑とは万暦五年（一五七七）を指し、茅本の刊行より二年早い。つまり、万暦の初めわずか十年以内に、楊本・張本・茅本が相継いで刊

行されたことになる。

清末の蔵書家沈徳寿編『抱経楼蔵書志』巻六十二には、『玉台新詠』の抄本十巻を著録し、あわせて張嗣修の識語をのせる。

春杪客于武林、旅舎無事、録一袖珍本。一以家蔵宋本為正、有諸本互見処、間為考註焉。時万暦丁丑四月望後一日、張嗣修書于松桂山房。

これによれば、張本の底本は、万暦五年の晩春、武林（杭州）に遊んだとき、旅舎のつれづれに家蔵の宋版に基づきつつ、諸書に拠ってまま考注を加えた袖珍本（写本）であった。家蔵の宋版とは、後に引く清の学者李慈銘（一八二九―一八九四）によれば、南宋の陳玉父本である。従って妄増詩二百に象徴されるような俗本の乱れはなかったらしい。

沈徳寿は同条に孟璟の識語をも併載する。

是編、伝写寖訛、久乏善本。華亭楊本、閑異宋刻。吾呉趙本、不無脱訛。玆于松陵趙氏、獲袖珍旧抄本。讎校精当、騰写古雅。梓人見之、請登梨棗。遂以原本鏤版云。康熙丁亥嘉平月古呉孟璟識。

「華亭の楊本」とは前述の楊本、「吾が呉の趙本」とは明末の趙均覆宋本を指す。孟璟によれば、張本（ただし、旧抄本）は「讎校精当」な善本らしいが、『四庫提要』巻三十七には、「万暦中の張嗣修本、増竄する所多し」として厳しく批判される（『考異』の条）。これに対して、李慈銘は『桃華聖解盦日記』（乙集第二集）光緒元年（一八七五）七月十一日の条で、

閲四庫提要総集類、傍晩坐庭下、取巾箱本明万暦間張嗣修所刻宋陳玉父本、以提要所言陳本優絀、及紀容舒考異本・馮武増注本、一一証之。知張本極為精審、紀氏謂其多所竄乱者、非也。

と述べて反論した。「馮武増注本」とは、「馮氏（舒）校定玉台新詠十巻」（馮武刊）を指すだろう。留意すべき点は三点ある。（1）巾箱本、（2）南宋の陳玉父本の覆刻、（3）極めて精審。巾箱本とは張嗣修のいわゆる「袖珍本」と同じであり、小字本ともいう。ちなみに、南宋の陳玉父本も巾箱本であったという（別稿参照）。

李慈銘は、光緒十四年二月十四日、張本が宋版（陳玉父本）に基づくすぐれた校本であることを再び確認していう（『荀学斎日記』壬集下）。

以乾隆間無錫華氏翻刻馮已蒼（舒）校趙寒山所鈔宋本玉台新詠、勘明万暦間張嗣修所刻小字本。両本雖同出永嘉陳玉父宋刻本、而各有改移。華本又頗拠万暦間楊刻本、而馮氏所校、亦有臆改。華氏多去其校語、惟存圏点而已。両刻幸皆附注「宋本作某、新本作某」、尚可考其大略。其校勘、則張刻誤字少耳。

無錫の華氏本とは、前述の錫山の華綺校刻[10]〝虞山二馮先生閲本〟を指す。行款は半葉九行、行十九字。内閣文庫所蔵本は、本来四冊のものを二冊に合本する。

また書籍の版本に対して独自の見識をもった清の沈曽植（一八五〇―一九二二）も、『海日楼題跋』巻一のなかで張本の優秀さを認めて『提要』の説に反論する。

此本、為紀容舒考異所詆。故四庫中不収。然提要称万暦中張嗣修本、則疑亦未曽親見此刻者。又云、多所増竄。而覈諸提要所云、乃皆与宋本符合、未曽見増竄之迹。趙本（趙均覆宋本）流伝漸稀、此固不失為佳刻、非後来各本可比。提要、昔人有議其考証疎舛者。疑其言不虚也。

この李・沈の二説をうけて、胡玉縉（一八五九―一九四〇）は『四庫全書総目提要補正』巻五十六のなかで、「提要の云う所は、乃ち紀（容舒）の説の誤りに沿う」と結論づけた。ただ『提要』の撰者が張本を直接見なかったのではないかという沈氏の記述はやや疑問である。これは張本が孟璟を通して初めて世間に流伝し、それ以前は写本であっ

たことを言おうとするのかも知れない。その場合、李氏の「万暦張嗣修所刻」の記述等と矛盾することになる。

なお孟璟の刊行した張本は、徐乃昌の「札記」のなかで、趙均覆宋本には劣ると評されながらも、五雲渓館本とともに文字の校勘に頻用されている。

（b）徐学謨の嘉靖刊本

本書は、台湾の『国立中央図書館善本書目』甲編巻四に、「玉台新詠十巻、続五巻、八冊陳徐陵編　明徐学謨続編　明嘉靖間徐氏海曙楼刊本」と著録される。これによれば、続編五巻の編者は徐学謨（一五二二―一五七三）自身のことになるが、おそらく鄭玄撫の編纂したものであろう。とすれば、鄭玄撫本の刊行は嘉靖十九年（一五四〇）であるので、以後、二十年以内の出版となる。本書を刊行した徐学謨は、字は思量。各地で治績をあげ、『海隅集』七十七巻等の著書を持つ。朱彝尊の『静志居詩話』巻十三には、「雅より詩名を負う。然れども儒き響き多く、殆ど其の人に肖たり」と評される。ちなみに、丁丙の『善本書室蔵書志』巻三十八（十冊本）にも、嘉靖刊本を著録し、「続選は名氏を著さず」とあるが、当条に引用する陳・隋の詩人名の列記によれば、鄭玄撫の撰である。同書にはまた、嘉靖二十二年（一五三四）の日づけをもつ華亭の張世美の跋があり、

吾松陵旧有宋刻本。楊君士開、遂購而校刻、頗為精善云。

と記されているというが、両者の関係は資料不足で詳かではない。あるいは楊君とは、前述の楊元鑰と関係するのかも知れない。

清の程際盛（原名は炎）は、呉兆宜原註本の対校に本書を使用した。乾隆三十九年（一七七四）に成る程氏の跋に、「板は趙（均の）刻に従い、徐刻と同異を校対す」とある。同跋にはまた「王西荘先生蔵有嘉靖間徐学謨海曙楼刻、

亦為古雅」とあり、王鳴盛（西莊）の所蔵本が用いられたことを示す。『箋註』本にみえる程氏の懇切な対校の注記によれば、本書はほぼ内閣文庫所蔵本の二種と同じであり、同一系統のテキストであることがわかる。従っていわゆる妄増詩約二百を有する俗本となるわけであるが、明版がすでに稀覯本となった現在、宋版（趙均覆宋本）と明版との綿密な対校は、種々の面で大変便利であると評してよい。

森立之編『経籍訪古志』巻六には、狩谷棭斎の求古楼蔵嘉靖中翻雕宋本を著録し、

首有徐陵序、毎半板十五行、行三十字、界長六寸七分、幅四寸五分、末有嘉定乙亥陳玉久跋。知依嘉定本重雕者。又有明崇禎癸酉趙均刊本、乃原此本……蓋以此本為最古云。

とある。葉徳輝はこれを徐学謨本であるとし、「仿宋古雅、愛すべし」と評する（『郎園読書志』巻十五）。。ところが、溥増湘の『双鑑楼善本書目』巻四に著録する記述「明嘉靖刊本、九行二十字」は、『経籍訪古志』に記す行款と異なる。妄増詩が非常に多いことからすれば、たとえ陳玉父の跋文があったとしても、直接陳玉父本から重雕したものではない。また趙均覆宋本が「此の本に原づく」とする記述も誤りである。趙均は家蔵の宋版に基づいて刊行した（別稿参照）。嘉靖十九年の後序を持つ前述の『続玉台新詠』一冊本が本来『玉台新詠』十巻本に付載されたことを考えると、嘉靖刊本は少なくとも二種以上あることを想定できる[11]（丁氏著録本にも注意）。

（c）沈逢春校天啓二年序刊本

内閣文庫所蔵明版の一種。毎半葉九行、行十九字、縦二十五・八センチ、横十六・五センチ、四周単辺。巻頭に袁宏道撰「玉台新詠序」を持ち、次に徐陵の序と天啓壬戌（二年）の沈逢春の序が続く。本書もいわゆる妄増詩約二百の俗本であり、所収詩数や配列は楊本と推定した内閣文庫所蔵のもう一種と全く同じである。全三冊のうち、第一冊

は巻一から巻五、第二冊は巻六から巻九、第三冊は巻十と鄭玄撫撰『続玉台新詠』四巻を収める（既述）。

本書の特徴は、（1）各詩人の下に略伝がある、（2）詩の本文の傍に「凄然」「情景逼真」等の短い評語がつく、の二点である。その評語は、袁宏道みずから「筆を肆（ほしいまま）にして批閲」したものという（序）。また公安派の袁宏道の序を持つことは、すでに別稿で触れたように、『玉台新詠』が反古文辞派の人々の間で注目されたことを示す。また袁宏道は序のなかで「板剝（は）がれ、蝕字模糊」たる状態を嘆き、善本が重刻されることを願っている。本書を校定した銭塘の沈逢春の序はすでに一部を引いたので、今、紙幅の関係でその詳細を略す。(12)

注

（1）本書で別稿と称するのは、「明末・清初の『玉台新詠』研究の確立」（早大『中国文学研究』第七期）と「幻の宋版『玉台新詠』陳玉父本を中心として」（早大『中国古典研究』第二六号）の二つを指す。

（2）『箋註』本や虞山二馮先生閲本等所収。

（3）北京図書館編『中国版刻図録』増訂本では、横を十三センチとする。

（4）上海古籍出版社『唐五十家詩集』（全八冊）の徐鵬の「前言」参照。

（5）毛春翔著『古書版本常談』活字本や葉徳輝『書林清話』「明錫山華氏活字板」等所引。

（6）劉家璧編訂『中国図書史資料集』に収める銭存訓「論明代銅活字板問題」によれば、華堅は華燧の兄の華烱（一四二八―一五〇四）の幼子であり、華鏡は華堅の長子である。

（7）『読書敏求記』巻四、左克明古楽府十巻の条（別稿にも引く）参照。

（8）台湾の『国立中央図書館善本書目』甲編巻四にも、北京図書館と同様に四冊本と八冊本の二部を著録する。

（9）『汲古閣校刻書目』にも『玉台新詠』を著録するが、詳細は未詳。

（10）鄭振鐸の『西諦書目』巻四に「清乾隆二十六年錫山華綺刊本四冊」「清康熙五十三年馮鰲刊本二冊」を著録することからす

れば、まず康熙五十三年（一七一四）に刊行された馮鰲の校定をへたテキストがあり、乾隆二十六年（一七六一）、華綺によって「多く其の校語を去」られて出版されたものか。内閣文庫本にも東大文学部本にも、年月を記した序跋や刊記はない。またこの華綺校刻本が「頗る万曆間の楊刻本に拠る」とする指摘も興味深い。

（11）鄭振鐸の『西諦題跋』や『西諦目録』巻四にも、嘉靖刊本の記述があるが、行款等は記されていない。

（12）詩歌は抒情表現であるという観点から『詩経』から唐詩に到る抒情詩の流れに着目し、『玉台新詠』は『文選』と唐詩との間に介在する「情を離れざる」詩集であるとする。

○貴重な図書の閲覧を許可された内閣文庫関係各位に対して、紙面を借りてお礼申しあげます。なお鄭玄撫の『続玉台新詠』は、近年影印された成都古籍書店刊、呉兆宜注『玉台新詠』（民国二十四年の黄芸楣の叙をもつ）のなかに付載されている。